

皮心伝心

「患者」は「症例」ではありません

学会の楽しみの一つは症例報告を聴くことです。日々の診療で生じた疑問を解決するためのヒントは、教育講演より症例報告から得られることが多い気がします。しかし、若手の演者の発表が「症例は〇歳、女性(男性)です」ではじまり、内容に集中できなくなることがよくあります。当然ですが、正しいのは「患者は～」です。このような発表を聴くと、「患者」を「症例」(学会発表や論文のネタ)としてしかみていないのではないかと疑ってしまいます。

症例(case)とはある疾患の特定の例であり、患者(patient)とは医療を受けている特定の人のことです(AMA Manual of Style)。すなわち、入院したり、投薬されたりするのは「症例」ではなく「患者」であり、報告されるのは「患者」ではなく「症例」です。ちなみに、診断されるのは「患者」ではなく「症状」や「疾患」です。

昔の学会では、他施設からの発表でも用語の間違いや言葉遣いについて、偉い先生が厳しく指摘してくださることがよくありましたが、最近は(少なくとも全国規模の学会では)あまり目にしなくなりました。学会発表は聴衆に伝えるために行うのであり、正確でわかりやすい表現を心がけるべきだと思います。また、単純な間違いが多いと、内容の信頼性を疑われることにもなりかねません。

以下に学会発表で(論文でも)よくある間違い(気になる表現)の一部を列挙します。

- ・「～の一例」ではなく「～の1例」。「二例」「三例」ではなく「2例」「3例」ですので、正しいのは「1例」です。
- ・「奏功」ではなく「奏効」。効果があらわれることは「奏効」です。功を奏したではありません。
- ・「〇年前より～が出現」ではなく「〇年前に～が出現」。出現ではなく出没なら「より」でもよいですが、「より」は比較にも用いられるので、時間的起点を示す場合はなるべく「から」を使うべきです。
- ・「にて」「するも」「となる」は使わない。「近医にて」「～の診断にて」の「にて」は「で」。「～するも」は「～しましたが」が正しい現代語です。「精査加療目的にて入院となりました」ではなく「精査と加療を目的として入院しました」です。「～のほう」や「なります」(「スライドは検査結果のほうになります」など)も避けるべき表現です。
- ・「小豆大」「大豆大」などは使わない。計測して〇 mmで示しましょう。
- ・最近ほとんどなくなりましたが、敬体(です・ます調)ではなく常体(だ・である調)で発表する(原稿を棒読みする)演者がまだいます。「タメ口」で発表するのと同じです。

河井 一浩

(新潟医療生活協同組合木戸病院皮膚科部長)